

氏名	苅 田 總一郎		
学位の種類	医 学 博 士		
学位授与番号	乙 第 1002 号		
学位授与の日付	昭和53年12月31日		
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第5条第2項該当)		
学位論文題目	小児期の大発作てんかんに関する臨床的脳波学的研究		
論文審査委員	教授 大月三郎	教授 森 昭胤	教授 高坂睦年

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

小児期の大発作てんかんの特徴並びに経過、予後を評価する目的で、5年以上の長期間にわたり観察し得た427例につき臨床的脳波学的研究を行った。

その結果、予後良好群（良群）が176例（41.2%）を占め、一方予後不良群（悪群）は13例（3.0%）にすぎず、中間群は238例（55.8%）であった。臨床的に、精神薄弱の合併および睡眠覚醒サイクルが予後と強く関連していた。最も顕著な所見は、初診時脳波の焦点の局在で、中心部、中側頭部に焦点を有するものは予後良好を、一方前頭部焦点のものは予後不良を示唆する重要な所見と考えられた。更に初診時に表在性焦点を有するものは予後良好で、発作波も消失し易く、一方深部焦点のものは予後不良で、発作波も消失し難いことも注目すべき所見であった。

継続的脳波学的観察において、良群でも5年後のてんかん波の残存率は51.6%と高率であり、発作波の消失に長期間を要したことは、日常診療上重要と思われる。

以上の知見より、小児の大発作てんかんの特徴を明らかにし、予後に関しても、初診時脳波所見が有力な示標となりうることを、継続的脳波検査が治療上有意義であることを明らかにした。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は小児期の大発作てんかんの特徴を、臨床的、脳波学的に研究したものである。従来知見が不十分であった本症の経過と予後に及ぼす諸要因を明らかにしたものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。